

もっと知りたい 武者小路実篤

詩3 のびのび

武者小路実篤の詩には、無邪気な思いつきや、のんきな楽しい気分が書かれています。

そんな実篤の詩を読むと、私たちの心もゆったり明るくなります。深呼吸して、のびのびしましょう。

長い廊下

長い廊下を一人で

どしんどしんどしんと

大股で力を入れて歩いて見たい。

そうして時々、大声で怒鳴って見たい。

お——い

反響のない所で

力を入れて歩くのは、

損な気がする。

反響のない所で、どなって見るのも。

消えてゆくのが淋しい。

どしんどしんどしんと

あたりにそれが響く。

お——い

あたりにそれが響く。

その内を一人で、小供らしく歩いて見たい。

(後略)



つわぶき 昭和44年



あなたも、誰もいない学校の廊下で、こんな思いをしたことはありませんか。「長い廊下」に書かれた気持ち、よく分かりますね。

この詩を書いた時、実篤は24歳。子供っぽい？ いいえ、大人だからとカッコつけずに、思ったままを書いているのです。

絵に書かれた言葉のように、人目ばかり気にしないで、マイペースでいきましよう。

川の流れ

川の流れを

見ているのはすきだ、

いつまでも見ていたい、

生きている、生きている、

辛い程、生きている。

お前達はうれしいうらやう。

海へゆける。

心のよろこび

だまってほったらかしておく

いつのまにか

元気になってよろこんでいる

俺の心の呑気さ。

😊😊😊

この心のよろこび

俺はどこかでいいことをしているのだから。

この心のよろこび

😊😊😊

心と云う奴は

余程よろこびたがる動物なのだが

人々はあまりに

いろいろの重荷を

負わせすぎるのではないかな。

😊😊😊

誰の心でも

無心になれば

自づと

よろこべるものではないのかな

——



向日葵 昭和43年



考えすぎないで、身のまわりの自然の中で、見えるもの、聞こえること、なんでも素直に感じてみましょう。

実篤は「言葉に羽が生えると詩になる」と言っています。

のびのびして、心がよろこべば、あなたの言葉にも羽が生えて、詩になるかもしれせんよ。

◆長い廊下
（「日権」明治43年10月号より）
◆川の流れ
（「詩」大正10年1月号より）
◆心のよろこび
（「草原」より 大正13年4月 新潮社刊）

（後略）